

科学観が変動するメカニズムとイデオロギー

——科学観・高等教育観の計量社会学——

株式会社原子力安全システム研究所 藤田智博

【1. 目的】

科学技術は、世の中に恩恵をもたらす一方で、リスクも含むがゆえに、恩恵とリスクのどちらを多く見積もるかによって人々の科学観が変動することが予測される。先行研究では、国際比較から、豊かな国において科学観が必ずしも肯定的ではなくなることを指摘しており（Price and Peterson 2016）、先進国においてはリスクが強調されることを主張しているものの、経済発展の水準が一定以上に達した先進国内部での科学観の変動を説明できるのか否かは定かではない。そこで、経済発展の程度が一定の水準に達し、成長率がかつてほど高くはなくなっている先進国における科学観の変動と変動メカニズムを明らかにすることを目的とする。仮説として、先進国において、経済発展の水準が相対的に低まった際、科学への肯定的な評価が高まること、また、その際に、保守やリベラルといった政治的イデオロギーが一定の役割を果たしているのではないかと考える。

【2. 方法】

使用するデータは世界価値観調査の第5回（2005年）と第6回（2010年）の日本版である。日本においては、2005年から2010年にかけて、経済発展の指標とされるGDP、一人あたりGDPは縮小している。また、先行研究において豊かさの指標とされる高等教育進学率、インターネット普及率は上昇し、乳児死亡率は低下している。先行研究の予測が正しいならば、高等教育進学率、インターネット普及率が上昇し、乳児死亡率が低下していることから、2010年において科学観は否定的になるはずである。2005年と2010年の調査データを結合し、時代効果を仮定したOLSによって、変数間の関連を推定した。被説明変数には科学観に関する3つの質問項目、説明変数には、調査年（2010年）ダミー、政治的イデオロギー（保守自己認知、保守で数値大）、基本属性（男性ダミー、年齢、従業上の地位、教育年数）の他、日本人の回答特性とされる中間回答選好の指標を作成・投入した。

【3. 結果】

調査年ダミーの正の影響が明らかになった。また、イデオロギーと調査年ダミーの交互作用項が負で有意になることが明らかになった。すなわち、先行研究の予測とは逆に、2010年において科学観は肯定的なものに変化していた。そして、その影響は政治的イデオロギーに依存しており、保守を自認している層は2010年には科学観は否定的であり、リベラルを自認している層は肯定的であった。この結果は、先行研究において指摘されていた高等教育進学率やインターネット普及率が高まり、乳児死亡率が低下することによって、人々の科学へのリスクが強調され、科学観が否定的になるという説に修正が必要であることを示している。

【4. 結論】

政治的イデオロギーとの依存性を考慮するならば、経済発展の水準が、政治的なイデオロギーと連動しながら科学観に影響を及ぼしているという説は一概には否定しがたい。もちろん、経済発展の水準以外の指標が影響を及ぼしている可能性も否定しえないものの、発展途上国における科学技術への期待の高さも含め、科学技術の恩恵を人びとが経済的な豊かさへの希求や達成を通して評価するメカニズムも安易には否定できないと考えられる。

Price, A. M. and Peterson, L. P., 2016, "Scientific Progress, Risk, and Development: Explaining Attitudes toward Science Cross-nationally," *International Sociology* 31(1): 57-80.